

三浦綾子さんを偲んで

渋川教会報「たびじ」(No.65) 1999.12/19 発行より

小鮎 實牧師

去る 10 月 12 日午後 5 時 39 分、三浦綾子さんは多臓器不全のため北海道旭川市の病院で召天されました(77 歳)。「私にはまだ死ぬという大切な仕事がある」と言っておられた三浦さん。立派に最後のお仕事をされました。ご苦労様でした。天国で安らかにお休み下さい。

インターネットの三浦綾子関連サイトには、同氏(姉)のファンのお悔やみのメールが沢山寄せられました。外国からのメールもありました。

三浦さんは、クリスチャン作家として、数多くの小説、随筆を書き、多くの人たちに愛と希望、また、生きる勇気と感動を与えました。否、今も与え続けております。

三浦さんの本の中に出てくるお気に入りの言葉を書き記すページには多くの言葉が書き込まれています。そのいくつかを紹介してみます。

自分一人ぐらいと思っではいけない。その一人ぐらいと思っている自分に、たくさんの人がかかわっている。(「氷点」より)

自分を偉いと思う人間に、偉い人はいない。(「塩狩峠」より)

人が一生を終えた後に残るのはその人が集めたものではなく、与えたものである。(「続氷点」より)

モッコは重いほうを持て。(「ナナカマドの街」より)

愛するということは許すことだよ。(「ひつじが丘」より)

人間は自分の短所によっても人を傷つけるけど、長所によっても人を絶望させるほど傷つけるもの... (「裁きの家」より)

難儀なことだからやってみる。楽なことなら誰でもやるさ。しかし難儀なことは、やる気のある者でなければやれない。(「泥流地帯」より)

人間恩返しをしたと思ったら、途端に恩を忘れたことになる。恩を返したと思うことが最大の忘恩だ。(「銃口」より)

人間は「何になるか」を考える前に、まず「どのように生きるべきか」を考えるべきではないだろうか。(「孤独のとなり」より)

ほんとうに人を愛するということは、その人が一人でいても、生きていけるようにしてあげること... (「道ありき」より)

家庭は愛を学ぶ学校である。(「あさっての風」より)

その他沢山。聖書の言葉も多数。すばらしい言葉を沢山残して下さった三浦綾子さん、本当にありがとうございました。(一ファンとして)